越谷市制50周年
KOSHIGAYA

平成２０年度

第４０回　越谷市民文化祭

平成２０年１１月２１日（金）～２４日（月）

１０：００～１９：００（最終日は１８：００）

郷土研究の部・展示部門出品紹介

於　越谷コミュニティセンター　大ホールホワイエ

◇周りの１０個の輪は、昭和２９年１１月３日に合併した十町村である二町八ケ村（「越谷町」の誕生）をあらわす。
十町村とは、越ケ谷町・大沢町・桜井村・新方村・増林村・大袋村・荻島村・出羽村・蒲生村・大相模村をさす。

◇中央部周りのデザインは、カタカナの『コ』を４個集めたもの。
つまり、越谷の『越』（「コ４」）を意味する。

◇中心部のデザインは越谷の『谷』の文字を図案化したものである。

◇昭和３０年１１月３日には、草加町に合併していた川柳村のうち、伊原、麦塚、上谷が越谷町に入る。

◇越谷町は、昭和３３年１１月３日に市に昇格し、越谷市となる。

NPO法人・越谷市郷土研究会の事務所案内

「夢空感」にスペース借用し、事務所を新設、情報発信の拠点に！

このたび、念願の事務所をかねた情報発信拠点を、チャレンジショップ「夢空感」内のスペースに置かせていただくことになりました。

旧日光街道の北越谷（大沢）へ向かって右側、河内屋旅館さんの北側です。「いつか自分のお店を持ちたい」という方々のチャレンジのための空間です。そこにチョット異業種の、当会が入らせていただきました。

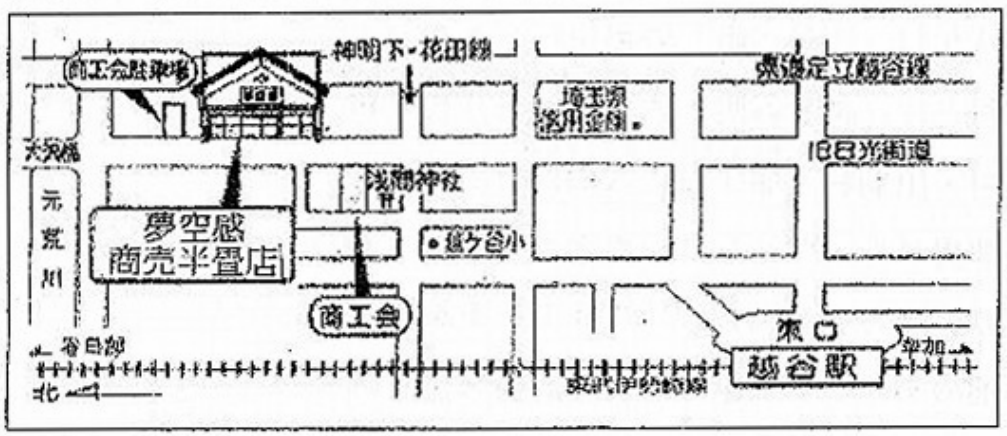
越谷特産のダルマ、桐箱、煎餅、太郎兵衛糯（もち）製のアラレのご紹介などを含めた、あらゆる意味での「越谷情報」を今後、発信していきたいと考えています。その他に、皆様が旧日光街道沿いの商店街へお出かけの際に「憩いの場、お休み場」としても、お使いいただきたいと思っています。是非、お気軽にお立ち寄りください。

「夢空感」は、月曜日は定休です。営業時間は午前１０時から午後６時（ただし当会は５時）までです。住所と当会の電話番号は下記のとおりです。

住所　343-0818 越ケ谷本町８－３　　電話及び FAX ０４８－９６２－２６５１

また、金曜日の朝は、市内の農業者の方の直売市（いち）が開かれています。新鮮な季節の野菜などが安く手にはいることで評判です。金曜朝を目指して、夢空感にお越しいただき、郷土研究会で一休みするのも名案です。

（以上、Ｈ１７・１２・１７のＮｏ．５４「りせ」より、一部手直しして紹介）



越谷市制50周年
KOSHIGAYA

第40回 市民文化祭
郷土研究の部・展示作品リスト

番号	題　　名	頁	出品者名	住　　所
1	５０年前の越谷を訪ねる	1	原田　民自	弥十郎
2	越谷地域の町村の変遷	3	加藤　幸一	春日部市大枝
3	川口市のお女郎仏と大沢	11	岩瀬　静江	赤山本町
4	新発見！越谷在住の絵馬師たち	12	木原　徹也	野田市中根
5	越谷市内の渡し場	13	篠原　陸郎	下間久里
6	越谷市内の草創期の小学校	19	菅波　昌夫	南越谷一丁目
7	花田のスナッカラ地蔵	21	秦野　秀明	大沢
8	越谷市民がほこれる『中島の鷺山』	23	山本　泰秀	増林二丁目

※上記の展示作品や越谷市郷土研究会の入会に関する問い合わせ先は、
ＮＰＯ法人・越谷市郷土研究会の宮川 進（当会会長・電話及びFAX９７５－９１３９）
までお願いします。

1

越谷市制50周年

50年前の越谷を訪ねる

原田 民自

五十年前の昭和三十四年（一九五九）につくられた満生・越谷・大沢を中心とした彩色地図がある。越谷が市制を布いたころの地図である。

越谷市誕生当時の人口は約四万八千人。現在では当時の六倍以上の三十二万人を越える人口に達する。

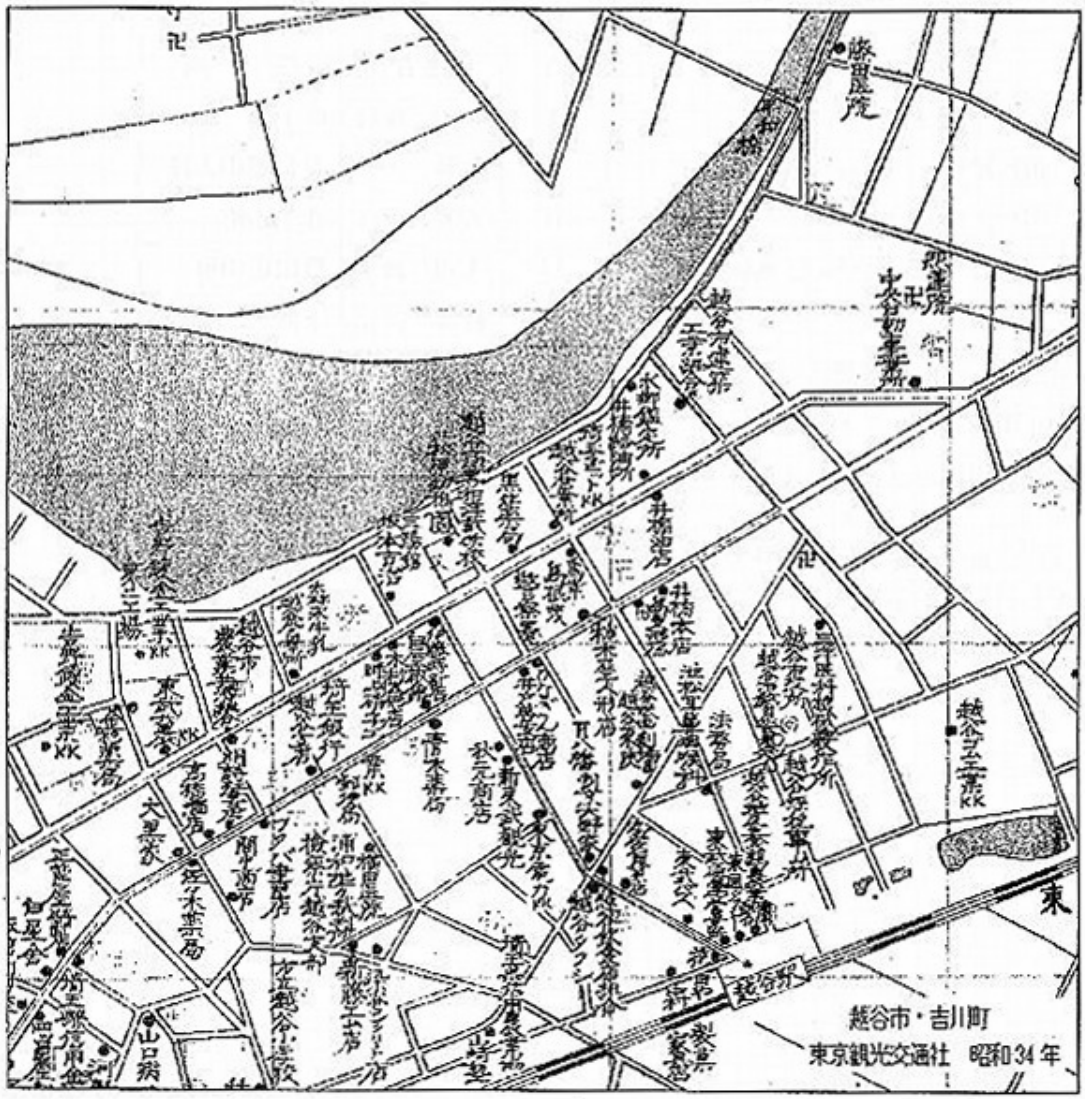
半世紀前の地図から越谷市をたどると、越谷駅から銀行通りを真っ直ぐ進むと元荒川で行き止まる。市役所と中央市民会館から望む平和橋と新平和橋は架けられていない。市立病院や総合体育館など様向うの東小林地域方面は田んぼが広がる未開発地域だった。

越谷ゴム工業の跡地にヨーカ堂が進出し、その道路沿いに旧市役所や法務局、県税事務所が置かれていた。

越谷映画劇場と越谷東映の2つの映画館があり、駅付近に洋品など月賦販売もしていた丸愛百貨店があった。越谷駅沿いの交番はすでに現在の位置にあった。

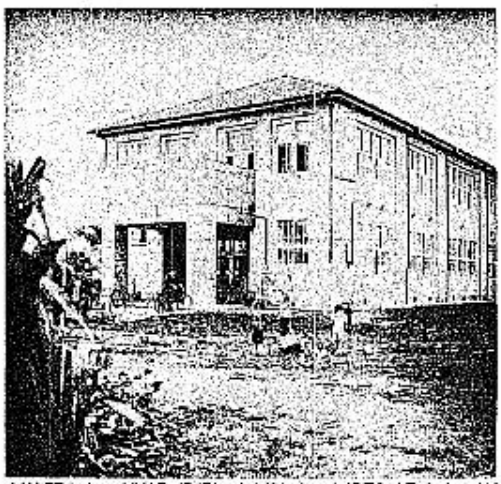
五十年前の地図から現在を比べると、市制が布かれた当時の越谷はまだまだ発展途上の町であり、米作やわら製品、桐箱を産業の中心とした農村でもあった。

越谷駅東口の再開発事業も進められ、数年後には今の町並みも大きく様変わりすることだろう。

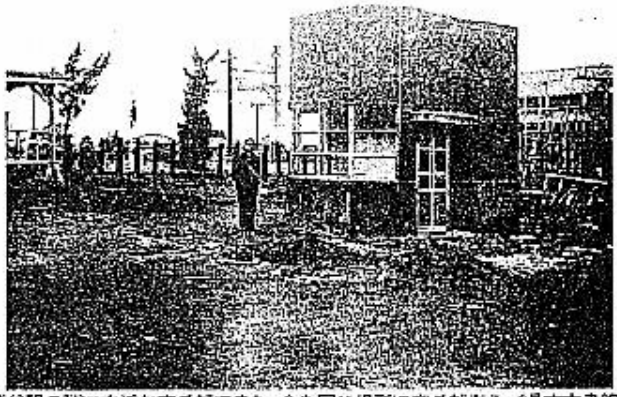


越谷市制50周年 KOSHIGAYA

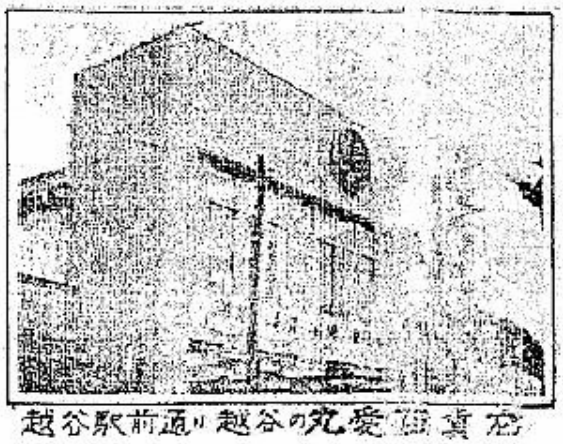
写真でよみがえる 半世紀前の越谷



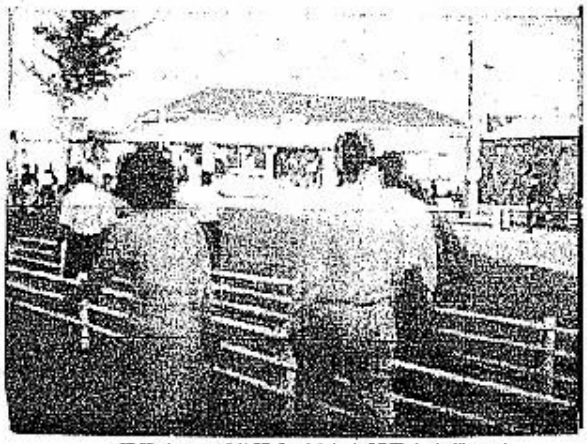
新築間もない越谷町役場＼市制後は旧市役所（県立文書館）



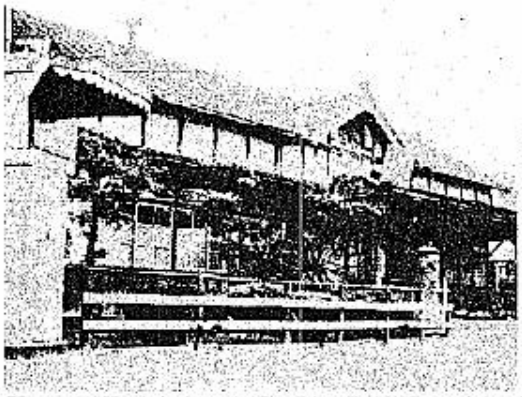
越谷駅の隣に立派な交番ができた 今も同じ場所に交番がある（県立文書館）



月賦販売で洋品などを売っていた（越谷市・吉川町）



平屋建ての越谷駅舎（豊かな明日をめざして）



街頭テレビが置かれた武州大沢駅＼現在の北越谷駅（天才キット）

市制施行当時も蒸気機関車が走っていた＼大袋駅（大杉カメラ店）

2．越谷地域の町村の変遷

――市制５０周年を迎えて――

加藤幸一

昭和３３年１１月３日の越谷市誕生当時の地方自治法では、市となる要件は、人口が５万人以上、その中心となる市街地の戸数が全体の６割以上などと規定している。

市制に対する市民の見解を知るために、市役所が翌年に中学校生徒の保護者を対象に行ったアンケート結果によると、次の通りである。（以下は、昭和５３年１１月１日発行の「広報こしがや」の『市史編さんだより』より抜粋）

まず「市役所の職員」についての項目では、旧村時代より民主的で親切な感じ、窓口も便利であると好感を示した人もいた反面、昔の地主の旦那ぶりをする人もまだいる、また職員が多いのに驚いた、多大な人件費を使って徴税だけをするなら支所を廃止したらよいと答えた人もいた。

「教育関係」では、青少年の不良化防止をはじめ、高等学校の新設、教育施設の拡充などの要望が多かったが、なかには学校の増設もよいが、教育内容を考慮してほしい、今の学校は野球ばかり教育している、また農繁期には学童の欠席を認めてほしいなどというものもあった。

「産業建設関係」では、道路や橋梁の改修、用排水路や下水道の工事促進を訴えたものが多かったが、道路の砂利配給が不公平である、市長や部長は各地域をみて廻る必要があると苦言を述べる者もいた。とくに当時盛んであった工場誘致運動に関しては、積極的に工場誘致を進め市税を下げるべきである、秩父市のように人里離れた山奥に近代的な都市がある、私は東京に近い越谷がいかに遅れた土地であるかを痛感している一人である、という意見を述べる人もいた反面、市は農地をつぶすことに積極的であるが、農地がつぶれて泣くのは農民である、農民も市民の一人である、と都市化に反対する答えもあった。

その他市民税が高い、水道が入ってからサラシ粉臭くなり、ウマイ水や茶が飲めなくなった等々数多くある。

次に越谷市が誕生するまでの越谷地域の町村の変遷を見ていくことにする。

1　江戸時代【２町４９か村】

江戸時代、現在の越谷地域（越谷市内）には、２町４９か村の町や村があった。

２町とは、①越ケ谷町・②大沢町

４９か村とは

１三野宮村・２大道村・３大竹村・４恩間村・５袋山村・６大林村・７大房村
８平方村・９大沼村・10上間久里村・11下間久里村・12大里村
13船渡村・14大松村・15大杉村・16川崎村・17向畑村・18大吉村・19弥十郎村
20増林村・21増森村・22中島村・23花田村・24小林村・25西方村・26東方村
27見田方村・28南百村・29四条村・30別府村・31千疋村・32野島村・33小曽川村
34砂原村・35荻島村・36後谷村・37西新井村・38長島村・39神明下村・40四丁野村
41谷中村・42七左衛門村・43越巻村・44大間野村・45瓦曽根村・46登戸村・
47蒲生村・48伊原村・49麦塚村

2　明治１２年（１８７９）【郡制施行】

明治１２年の新しい郡制施行にともなって、同じ郡内、あるいは隣接郡に同じ村名があることはまぎらわしいため、東西南北を村名の頭につけた。越谷地域では、24小林村は東小林（現在の菖蒲町に西小林がある）、16 川崎村は北川崎（現在の八潮市に南川崎がある）、35荻島村は南荻島（現在の羽生市に北荻島がある）、36後谷村は北後谷（現在の八潮市に南後谷がある）と村名を変更している。

3　明治２２年（１８８９）【１組合町８か村】

明治２２年４月１日、日本全国の７万余りの旧町村（共同体的な自然村であった）は、１万余りの新町村（行政上の町村となる）に吸収合併され、旧町村は新町村の大字として名をとどめることになる。現在の越谷地域もこの町村合併により、１町８か村の町と村々に吸収合併される。『明治の大合併』と呼ばれる「市制・町村制」の全国実施の一環である。全国７万の自然村が、約５分の１の１万５千の行政村にかわる。

１町とは、越ケ谷町・大沢町組合（①越ケ谷と②大沢の２町が１つの組合町となったもの）

８か村とは、

（１）大袋村（２）桜井村（３）新方村（４）増林村　（５）大相模村

（６）荻島村（７）出羽村（８）蒲生村

新８か村と旧４９か村との関係は次の通り。向かって左は新村名、右は大字である。

（１）大袋村　　１三野宮・２大道・３大竹・４恩間・５袋山・６大林・７大房

それに明治４年に恩間村から分村し独立した「恩間新田」もはいる。

大道、大竹、大林、大房の「大」と袋山の「袋」を合わせて新しく作られた村名。

（２）桜井村　　８平方・９大泊・10上間久里・11下間久里・12大里

この名前を付ける当時は、この地域の中世は河辺庄「桜井郷」に含まれていたと思われたことから、この郷名を採用した。しかしこの地域は、下総国葛飾郡下河辺庄新方郷に含まれていた。桜井郷は、これよりも北方にあったと推定されている。

（３）新方村　　13船渡・14大松・15大杉・16北川崎（川崎）・17向畑・18大吉

19弥十郎

このあたりは、近世「新方領」の一部であったことから、この領名を採用する。

（４）増林村　　20増林・21増森・22中島・23花田・24東小林（小林）

この地域で一番大きい村の「増林村」の村名を採用する。

（５）大相模村　25西方・26東方・27見田方・28南百・29四条・30別府・31千疋

このあたりは、中世「大相模郷」と呼ばれたことから、この郷名を採用する。

（６）荻島村　　32野島・33小曽川・34砂原・35南荻島（荻島）・36北後谷（後谷）・

37西新井・38長島

この地域で一番大きい村の「南荻島村」の江戸時代の村名「荻島村」を採用する。

（７）出羽村　　39神明下・40四丁野・41谷中・42七左衛門・43越巻・44大間野

この地域を流れている「出羽堀」の堀名から採用する。

（８）蒲生村　　45瓦曽根・46登村・47蒲生

この地域で一番大きい村の「蒲生村」の村名を採用する。

※川柳村に属した48伊原村・49麦塚村について

現在の越谷地域の旧２町４９か村のうち、旧２村の48伊原村・49麦塚村は、現在の草加市内にある柿木村、南青柳村（青柳）と合併し、合併村の新しく作られた新村名は「川柳村」と名付けられる。

「川柳村」は、柿木の「カ」、伊原の「ハ」、南青柳（青柳）の「ヤ」麦塚の「ギ」をそれぞれとって合成してできた村名である。「カハヤギ」は「かわやぎ」と読める。現在、川柳は、「かわやなぎ」と呼ばれている。

4　明治３５年（１９０２）【2町８か村】

越ケ谷・大沢の両町の組合町の分離によって、独立した２つの行政町となる。

２町とは、①越谷町・②大沢町

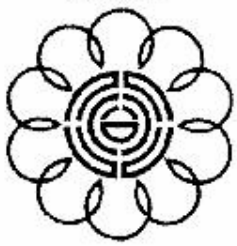
８か村とは、前と全く変わらない。

5　昭和２９年（１９５４）１１月３日【越谷町の誕生】

昭和２９年１１月３日、現在の越谷地域での２町８か村の町村合併により越谷町が誕生する。２町８か村が一つの町になったのである。その新しい町名「越谷」は「越ケ谷」の「ケ」をとったものである。「町村合併促進法」によって成立したもので、その後も全国的に町村合併が進められ、『昭和の大合併』と呼ばれる。

なお、翌年１月１０日に越谷町の町章が制定される。今日の越谷市の市章である。まわりの１０個の輪は、合併した１０町村（２町８か村）を表し、中央部分の外側は、カタカナの「コ」を４つ集めたもので、「コ」が４つ、コ４（こし）、つまり「越」を表し、中心部分は、「谷」の文字を図案化したものである。

越谷市章



6　翌年１１月３日【草加町の一部が越谷町に吸収合併】

昭和３０年８月１日に草加町に合併した川柳村のうち、48伊原・49麦塚・上谷が３か月後の１１月３日に草加町から分離して、越谷町に吸収合併される。越谷町の境界線の変更である。

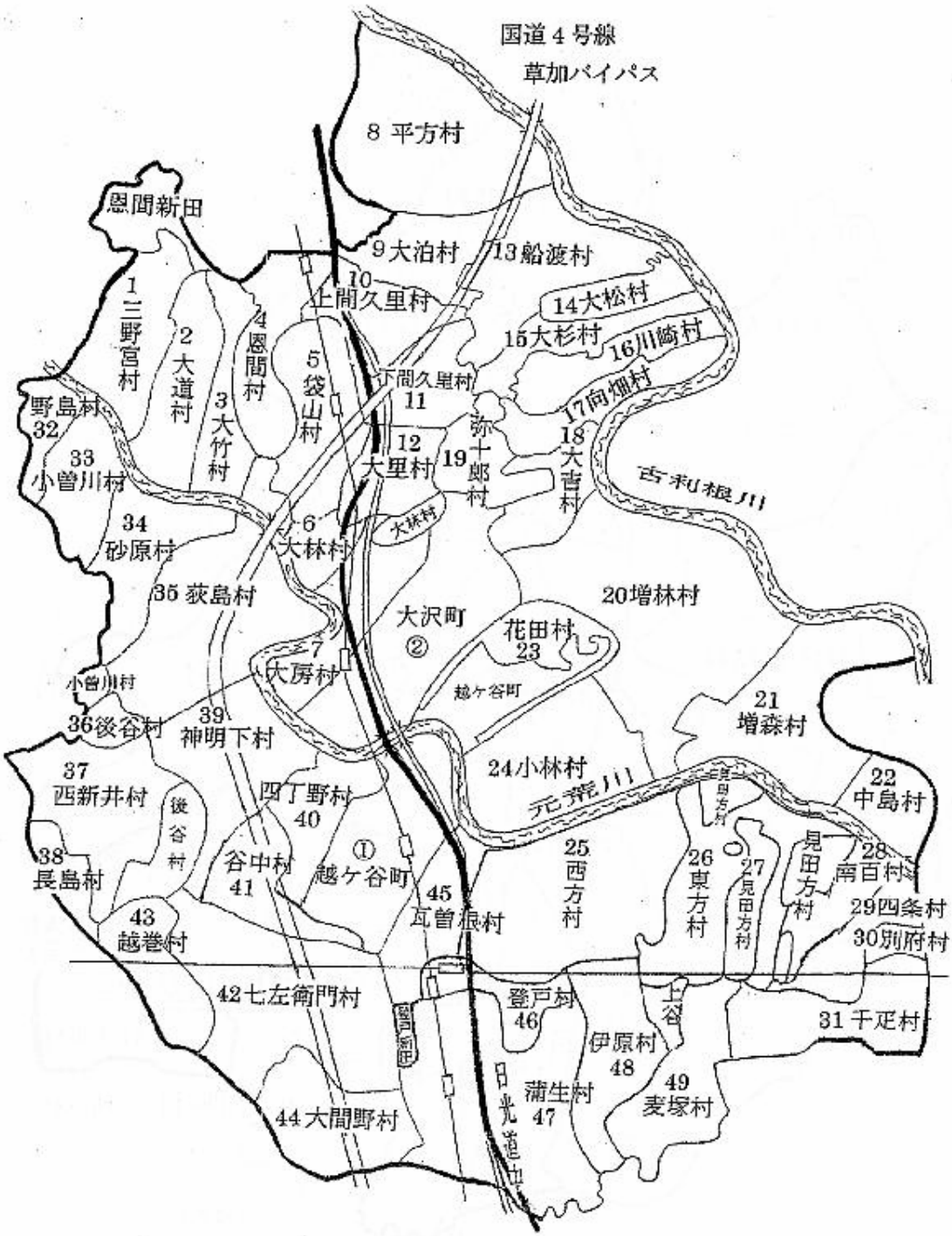
なお、上谷は、江戸時代以来、2 東方村の領分に入っていたが、東方村よりも周辺の村々との地理的な結びつきが強かったため、明治２２年の町村合併で川柳村に仮編入し、さらに戦後の昭和２５年の行政区画の変更により東方から離れて川柳村に正式に編入し、大相模村から川柳村に属するようになった。

7　昭和３３年１１月３日（１９５８）【越谷市に昇格】

越谷町は、昭和３３年１１月３日、埼玉県では２２番目、全国では５４３番目の市に昇格し、越谷市となる。２１番目は、昭和３３年１１月１日のちょっとの差で市に昇格した草加町である。誕生当時の越谷市の人口は、約４万８千人である。

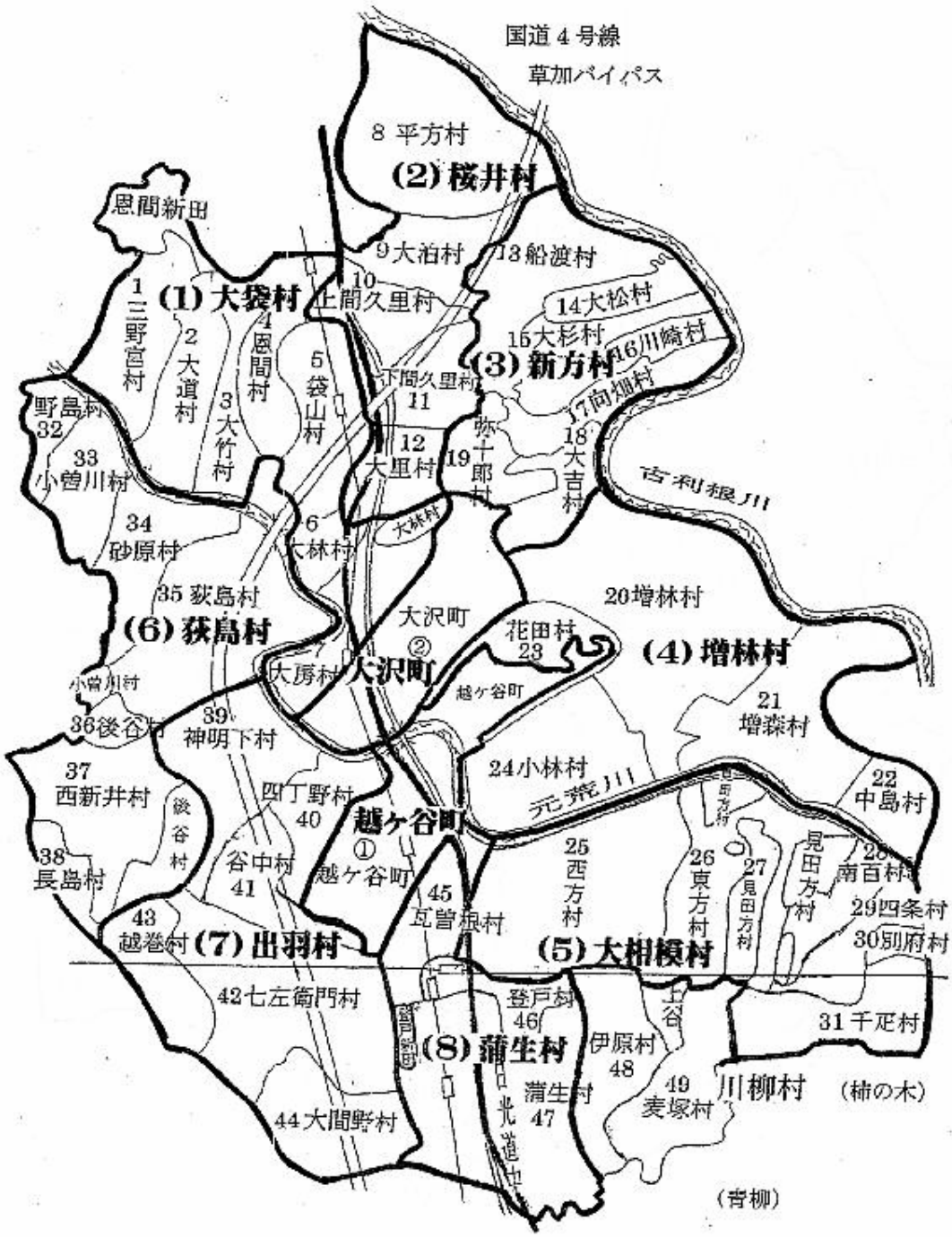
江戸時代の越谷地域

2町49か村の町や村があった



明治22年の町村合併後の越谷地域

1組合町8か村、後（明治35年）に2町8か村があった



昭和29年11月3日の越谷町誕生

2町8か村の町や村が一つに合併し、新たに「越谷町」が誕生

昭和33年11月3日の越谷市昇格

現在の「越谷市」になる

越谷市内の１２地区

①越ヶ谷地区　⑦大相模地区
②大沢地区　⑧荻島地区
③大袋地区　⑨出羽地区
④桜井地区　⑩蒲生地区
⑤新方地区　⑪北越谷地区
⑥増林地区　⑫川柳地区

上の⑪から⑩までの地区は旧２町８か村にほぼ相当する。ただし⑪の地区は、大房の一部と大沢の一部から成る。⑫の地区は、昭和30年に草加町の一部が越谷町に仲間入りした地区である。

戸口（戸数と人口）の推移

村	時代	文政	天保	明治9年				
地区	大字	注1 戸数	注2 戸数	注3 戸数	人口	（男）	（女）	牡馬
桜井	平方	185戸	186戸	204戸	1052人	519人	533人	15頭
	大治	50	42	60	303	145	158	1
	大星	50	45	48	248	122	126	
	上間久里	50	55	54	266	141	125	2
	下間久里	50	60	55	313	158	155	
新方	北川崎	50	50	53	279	139	140	1
	大吉	30	31	32	189	82	106	2
	高畑	60	59	62	386	182	204	3
	大松	18	19	23	113	63	50	
	大砂	31	33	33	200	100	100	2
	孫十郎	20	31	34	210	100	110	3
	船渡	108	92	112	575	250	325	3
大袋	恩間	90	80	58	287	152	135	10
	恩間新田			30	171	88	83	3
	大竹	56	45	58	308	158	150	3
	大道	87	85		393	212	181	5
	三野宮	64	60	71	353	175	178	13
	袋山	70	71	86	470	230	240	1
	大林	31	32	35	193	96	97	3
	大屋	50	55	63	313	156	157	
増林	増林	240	261	274	1517	749	768	5
	増森	130	136	156	872	440	432	2
	中島	30	33	42	206	101	105	1
	東小林	107	110	115	689	340	349	2
	花田	48	47	52	358	163	195	
荻島	砂原	64	60	67	365	181	184	5
	小曽川	62	40	49	252	126	126	1
	野島	19	18	26	148	75	72	2
	南荻島	131	128	138	790	390	400	3
	北荻谷	31	35	38	199	91	108	2
	長島	14	13	18	83	44	39	
	西新井	74	80	87	469	221	248	13
出羽	四丁野	66	64	76	411	205	206	
	谷中	48	49	50	295	137	158	2
	越巻	36	40	45	252	126	126	7
	大間野	54	59	69	410	215	195	
	七左衛門	114	103	134	728	353	375	7
	神明下	59	54	68	396	195	201	5
猪生	登戸	46	43	45	286	138	148	1
	瓜曽根	105	96	135	727	354	373	
	猪生	217	217	260	1438	711	727	1
大根崎	見田方	59	56	57	335	161	174	2
	千足	55	58	60	333	170	163	2
	別府	9	11	12	68	35	33	
	四条	32	28	35	199	104	95	
	南百	29	29	33	179	92	87	
	西方	160	179	188	1003	484	519	3
	東方	85	105	120	657	314	343	14
川柳	上谷							
	表塚	71	78	72	406	203	203	4
	伊原	75	73	82	469	226	243	6
大沢	大沢	481	466	450	2126	1055	1071	
越ヶ谷	越ヶ谷	549	538	595	2750	1370	1380	

文政年間は1818年～1830年
天保年間は1830年～1844年

注1 典拠「新編武蔵風土紀稿」
注2 典拠「武蔵国御改革組合限石高村数村名録」（学習院大学 論集4～1 所収大石慎三郎論文参照）
注3 典拠「武蔵国郡村誌」

◎恩間新田は明治4年に恩間村から分村し独立 ◎上谷は戦後まで東方領に属し東方の一部となっていた

３．川口の「お女郎仏」と越谷市内の大沢

岩瀬静江

川口市石神（旧・石神村）の御成街道（日光街道）の新町交差点から東に県道１０３号線を１５０メートル行った北側の県道沿いに「女郎堂」があり、そこには昔から「お女郎様」「お女郎仏」と呼ばれている墓石（戒名は、「蔵誉妙延信女」）が見られます。女郎とは、身分の高い女性という意味です。

これは、昔から下（しも）の病などの病気に霊験あらたかと言い伝えられてきたもので、特に女性の信者が多く、かなり広い地域に渡って熱心な信仰を集めていました。

越谷市内の大沢でも、女性たちに人気があり、戦前・戦後を通して、地元の女性たちが団体で牛車に乗って参拝に出掛けていく様子がよく見かけられました。女性たちを乗せる客車の周りには、落ちないように枠を取り付けていました。

大沢に遊郭があった関係もあって、女郎仏の御利益（ごりやく）を得ようと熱心に信仰されていた水商売の方も、古くからの地元の方と一緒になって、貸し切りバスで、この「お女郎さま」をコースに入れ、お参りに行っていました。

「お女郎さま」に関する昔話には、「病で行き倒れになった女の人が、近くの親切な人のお世話になり、最期の息を引き取るときになって、『私の墓に願いをかければ、必ず病を治してあげます』と言い残した。」そして、「甘い物をお供えするように」という話が残っていました。

ここでいう「女郎」とは、若くて身分の高い女性という本来の意味です。１８・９歳程の気品の高い女性であるとか、由緒あるお方などとの言い伝えが残っているのはそのためです。今日では、遊郭の出ではないかとの誤解が生まれやすいのが残念です。

女性を対象とした似たような信仰に、白像に乗って現れて人々を守ってくれると法華経が説く普賢菩薩の信仰があります。普賢菩薩は、女性の信仰を集めて美しい姿に作られました。それゆえに、美しい遊女が実は普賢菩薩の化身であったとの言い伝えが生まれ、江戸時代に遊女のことを普賢菩薩にたとえて「普賢」と言うのはそのためです。

女郎堂は、女郎と呼ばれた人の命日となる寛政２年（１７９０）３月６日に開山（開基）されました。堂宇は小さな祠で、境内がわずか三〇坪しかない、とても狭いところだったそうです。昭和８年（１９３３）に門前の東西に走る県道の拡張改修があり、そのとき境内の一部が買収されましたが、早船為五郎氏の篤志によって４００坪の土地を寄進という形で受け、さらに地蔵尊を安置するための新たな開山堂や札所等を信徒の浄財によって建て、昭和９年４月に竣工しています。

女郎仏の命日は、本来は３月６日であったのですが、明治以降に旧暦から新暦に変わると、月遅れの４月６日が命日となり、今日に至ったと思われています。

昔は「御命日には、弁当を持参、脚絆姿の善男善女や急造の馬車や牛車に揺られてきた団体の参拝人で境内は時ならぬ賑わいを呈した。」（「妙延寺・女郎仏」冊子より）そうです。

昭和２７年（１９５２）８月２１日に宗教法人となり、女郎仏の戒名にちなんで「妙延寺」と名付けられた真言宗寺院が設立されました。

なお、この「お女郎仏」信仰が広範囲に広がっていた名残として、船橋の寺町にある浄勝寺には、「蔵誉地蔵妙延信女」と刻まれた分身の石塔が祀られ、幕末の頃より「お女郎地蔵」として信仰されています。

※　主に、「妙延寺・女郎仏」冊子を参照しました。

4. 新発見！越谷在住の絵馬師たち

木原　徹也

越谷市にゆかりのある絵師・画人といえば、越谷市の文化財に指定されている「瓦曽根溜井図」を描いた幕末の浮世絵師、鳥文斎栄之（狩野栄川院）をあげることができる。他にも「越谷市史」には、谷文晁、酒井抱一、司馬江漢、さらに越ケ谷町出身の池田山鼎や越谷近在の旧家に多くの掛け軸や画賛を残した、謎の人、越谷山人の名前が記されている。これらの人々の他にも越谷ゆかりの絵師がいたかについては、全くつかんでいなかった。

ところが、最近になって越ケ谷に住んでいたと思われる、江戸時代末期の絵馬師の存在が明らかになったのである。

野田市教育委員会と野田市内の歴史愛好会である「野田地方史懇話会」の絵馬サークル（リーダー石田年子氏）とが共同で平成１８年度より野田市内及び近隣の絵馬の全数調査を行っている。この過程で越谷市に関係すると思われる絵馬師の存在を突き止めた。

石田氏のご教示によると、例えば野田市東金野井の天神社に奉納された「天保四年（１８３３）癸巳晩春」の紀年銘のある「日吉丸と蜂須賀小六図」絵馬には、「越谷亭　堤等谷画」とあり、さらに同市目吹の熊野神社に奉納されている天保１０年（１８３９）６月の「伊勢太々御神楽図」には、「越谷町　堤秋月」とあるので、越ケ谷町に居住あるいは出身の絵馬師であると思われる。いずれも力強い迫力のある大絵馬である。

この「堤等谷」と「堤秋月」とは別人とも思えるが、その関係、生没年、事歴などは、一切不明である。「堤秋月」は、新勝寺にも奉納しているので、かなり力量のある絵馬師であったであろう。この両絵馬師の現在までに判明している絵馬を最後に表にしてまとめた。

「千葉県文化財実態調査報告書――絵馬・彫刻編」によれば、絵馬師として「堤等淋」を祖とする「堤派」とでも言うべき一派があったとのことで、「越谷亭　堤秋月」・「越谷亭堤等谷」は、この「堤派」に属した絵馬師であったとみられる。

今後、地元の越谷市をはじめ、近隣地域の調査が進めば、越谷市に関係する堤派の絵馬師の作品が多く発見され、またそれらの事歴などが明らかになるものと期待している。

所在地		名称	年代	絵師名
１．野田市東金野井	天神社	日吉丸と蜂須賀小六	天保４年晩春	越谷亭　堤等谷
２．野田市目吹	熊野神社	伊勢太々御神楽	天保１０年６月	越谷町　堤秋月
３．旧庄和町西金野井	香取神社	武者絵	不明	越谷亭　堤秋月
４．旧庄和町西金野井	香取神社	天之岩戸	不明	越谷亭　堤等谷
５．旧庄和町立野	天満宮	神功皇后と武内宿祢	元治元年	堤秋月
６．旧庄和町神間	富多神社	伊勢二見ケ浦	天保４年９月	堤秋月
７．旧庄和町神間	富多神社	伊勢太々御神楽	天保６年４月	秋月
８．千葉県成田市	新勝寺	源義家霊験	江戸時代	堤秋月

なお、８は、「成田山新勝寺の絵馬」に掲載されている。

5．　越谷市内の渡し場

篠原陸郎　

現在、川を渡るには全て橋が架けられているが、昔は主要な往還道（日光街道の元荒川を渡る大沢板橋など）以外は橋が無かったので、ほとんどが舟を利用した。いわゆる渡し舟である。その発着場を渡し場という。

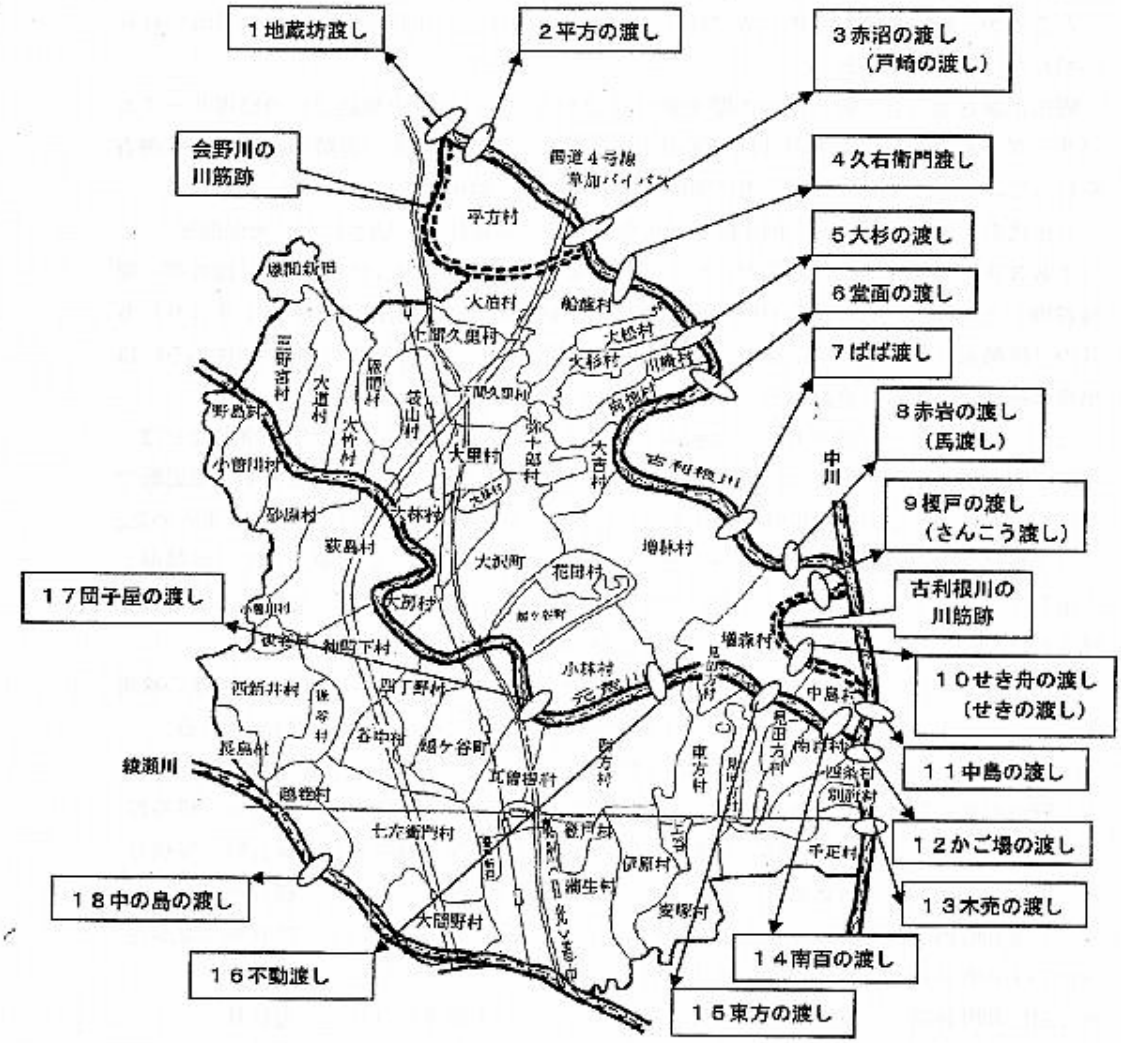
私有舟でない「公用」の渡しは、村の入用費や自費などで舟を備え、「渡し守」（渡し番・川番）が管理した。今でも「渡し守」を勤めたという家が残っている。

渡し守は渡舟運賃を徴収したが、村人は運賃の代りに米・麦などを毎年納めて利用したともいう。

江戸・明治・大正・昭和と、それぞれの渡し場は時代とともに消えたり、橋が架けられたりして、今では名前が一部残っている所もある。

ここに渡し賃を徴収して利用した公用の渡し場を、地図上に表してみた。

（尚、作成にあたっては、主に高崎力氏・加藤幸一氏の協力を得ました。）



発着場

1	備後～銚子口	7	増林～上赤沼	13	千疋～木売
2	平方～銚子口	8	増森～下赤沼	14	南百～中島
3	戸崎～赤沼	9	増森～榎戸	15	東方～増森
4	船渡～大川戸	10	増森～須賀	16	西方～小林
5	大杉～大川戸	11	中島～吉川	17	瓦曽根～小林
6	向畑～松伏	12	南百～吉川	18	越巻～中の島

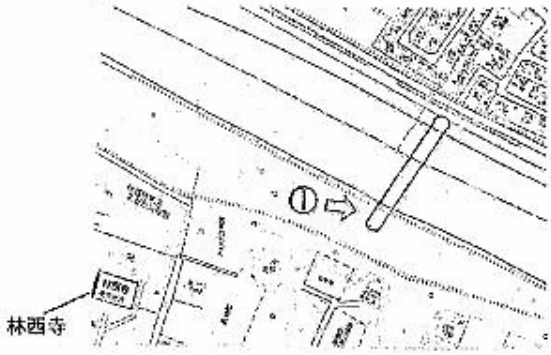
1 地蔵坊渡し（備後～銚子口）

⇨ 1

日光道中入口にお地蔵様があり、渡し場の目印となったので地蔵坊渡しと呼ばれたという。

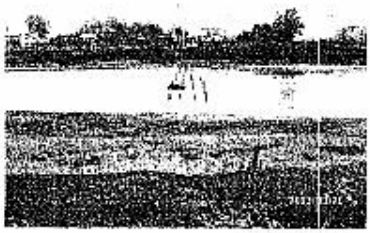
2 平方の渡し（平方～銚子口）

⇨ 1



3 赤沼の渡し（戸崎～赤沼）

⇨ 1



木橋の柱跡

⇨ 2

古利根橋を望む

水神宮（１８３５）

⇨ 3

古道

・昔は今の野田岩槻線がなく、この渡し場が赤沼へ行く唯一の往還道であった。

・昭和の始め頃、この木橋が架けられ、昭和３０年頃現在の野田岩槻線が出来て、古利根橋が架けられた。（今でも写真のように、木杭が残っている。）

・「赤沼の渡し」脇に「水神宮」の石塔があり、舟の安全を願ったものと思われる。

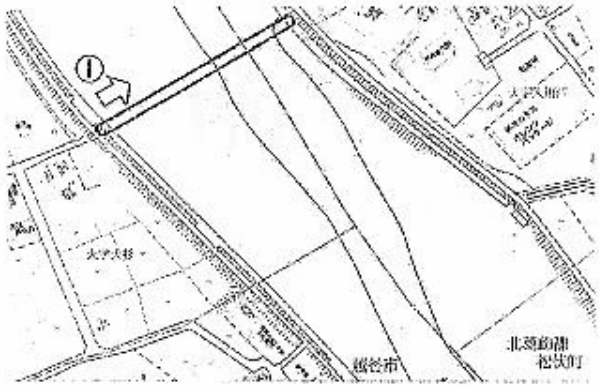
・ここの「渡し守」は「小早川家」が勤め、今でも同家の人が水神様を供養している。

4久右衛門渡し（船渡～大川戸）

⇨ 1

5大杉の渡し（大杉～大川戸）

⇨ 1



6堂面の渡し（向畑～松伏）

⇨ 1

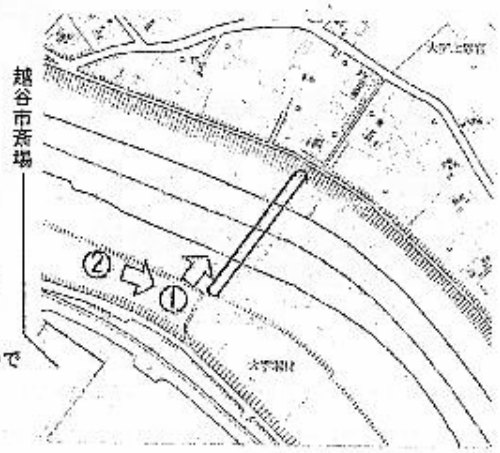
手前渡し場から堂面橋を望む

7ばば渡し（増林～上赤沼）

⇨ 1

⇨ 2

手前渡し場から「ふれあい橋」を望む



・「ばば」の由来は不明、　婆さんが渡し場に居たからとの言い伝えあり。

・「婆」を連想するので単に「渡し場」、あるいは地元が中組なので「中組の渡し場」ともいう。

・もともとは「馬場」という意味だったのかも知れない。

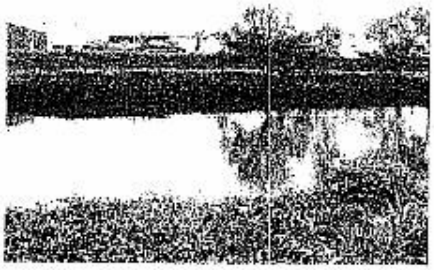
・（勝林寺大２６世の祖母の人の話）

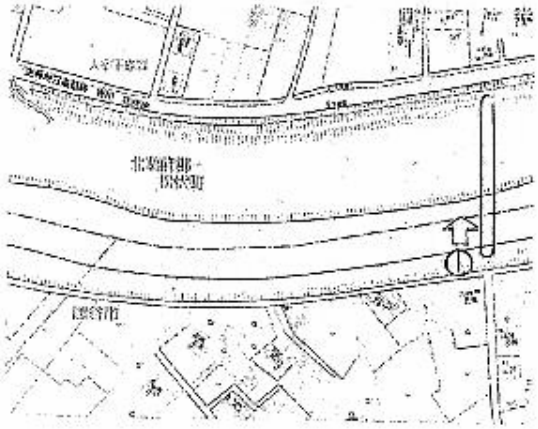
「大正の頃は、渡しの料金は往復で大人３銭、子供１銭、自転車は１０銭であったという。地元の中組の人達は、年に２回、秋に玄米３升、夏に麦６升納めたので、渡り賃は無しで渡れたという。」

・渡し場は戦後のカスリーン台風が襲ったＳ２２頃まで行われていた。

８赤岩の渡し（増森～下赤沼）

⇨ 1





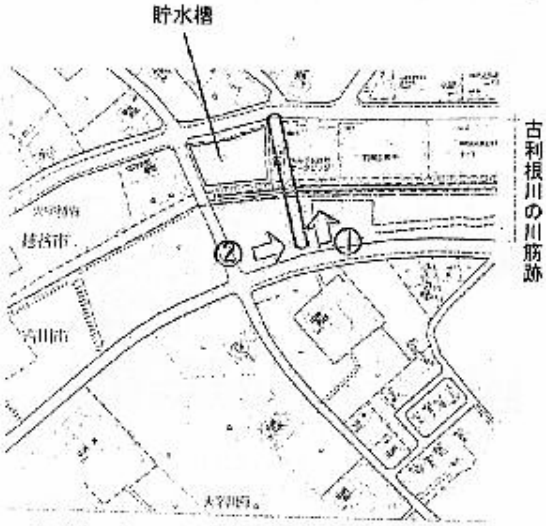
・ばば渡しの下流、増森の観音堂の北にあった。

・馬渡しともいい、人・馬の通船がみられた。

９榎戸の渡し（増森～榎戸）

⇨ 1

⇨ 2



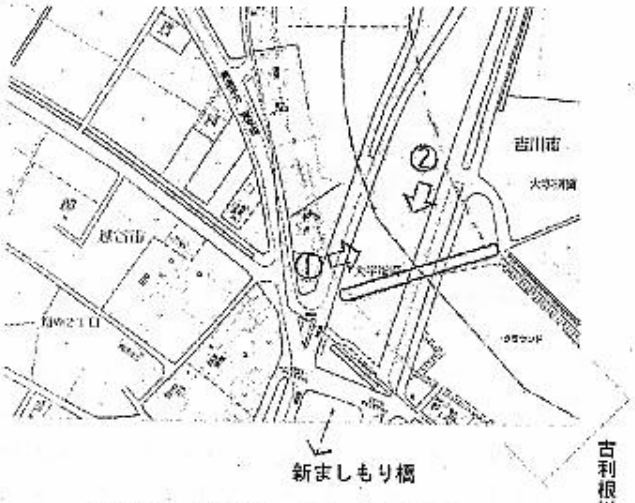
・昔は古利根川が曲流していた。現在は造成されているが、川筋跡の様子がうかがわれる。

・赤岩の渡しの下流、現在の丹下製作所あたり。

１０せき舟の渡し（増森～須賀）

⇨ 1

⇨ 2

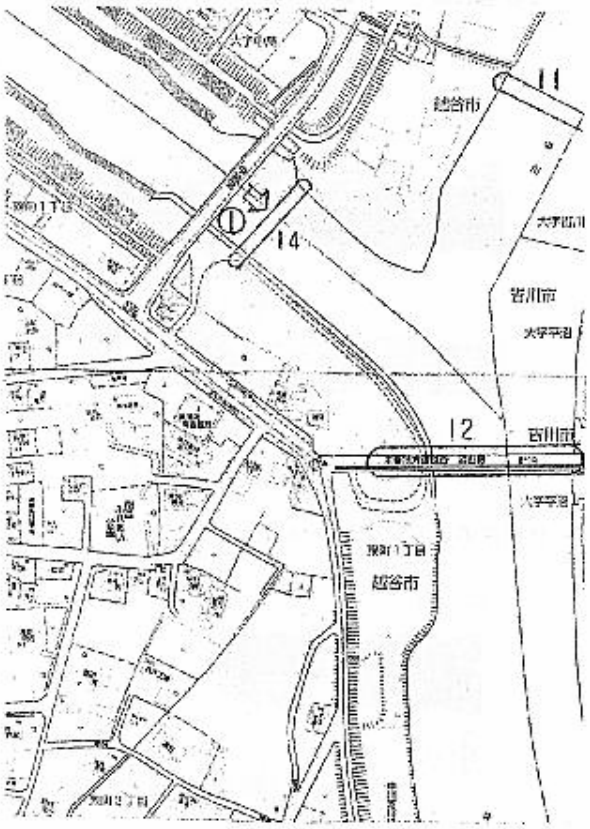


榎戸の渡しと同じく、今はない古利根川を新４号線が横断している。

１１中島の渡し（中島～吉川）

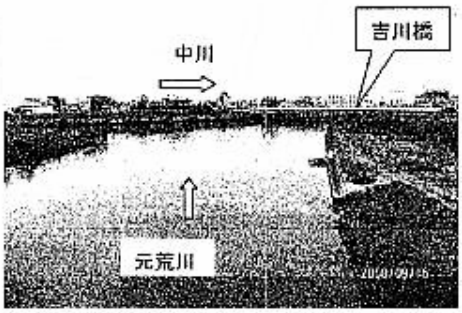
１２かご場の渡し（南百～吉川）

・吉川方面へ行く中川の渡し
・明治８年頃吉川町の徳江忠次郎という人が木橋を架ける。「徳江橋」（今の吉川橋）と呼んで、個人の橋のため通行料をとっていたという。
・後、県がこの木橋を買い取り５８年コンクリートの橋を架けた。



１４南百の渡し（南百～中島）

⇨　1



元荒川中島橋上より中川に向かい
・舟のあたりが１４南百の渡し
・中川左手あたりが１１中島の渡し
・中川右手吉川橋の位置が１２かご場の渡し

１５東方の渡し（東方～増森）

⇨　1

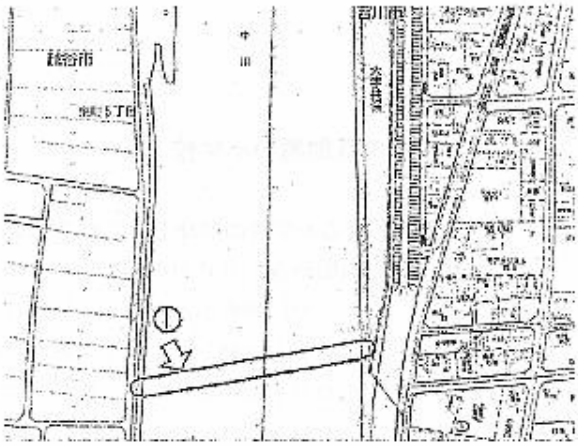
渡し守であった戸井田家の当主（祐三氏）の話

・現当主で３代にわたり江戸末期より、戦後間もない頃まで農業の副業として「渡し」をやった。
・戦前は２銭/人・片道の舟賃をとり、５～１０人/回、５～６回/日、人や自転車を運んだ。
・離島のようだった当時の増森・中島地区から学校へ通う先生などもいた。
・舟は自前で、家族が舟を漕ぎ、毎日の日銭は農家にとって大変助かった。
・対岸の渡し場には誰もいないため、客の合図は、川を渡したロープを引っぱると鈴が鳴ることで迎えにいった。

１３木売の渡し（千疋～木売）

⇨ 1

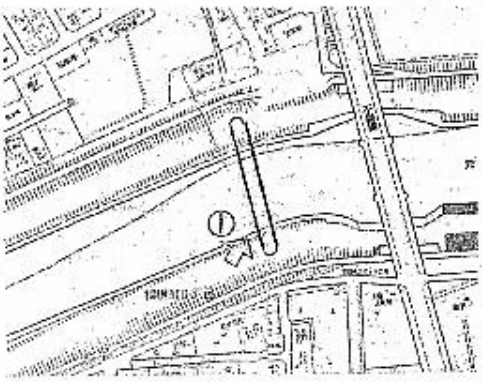
中川右手下流に水管橋を望む
船のあたりが渡し場



１６不動の渡し（西方～小林）

⇨ 1

増森村から西方村の大相模不動（大
聖寺）へ通じる元荒川の渡し場
下流に不動橋を望む

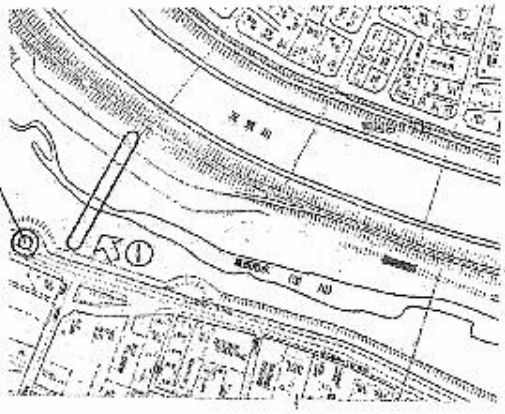


１７団子屋の渡し（瓦曽根～小林）

1

元荒川と葛西用水の間の中州へ
瓦曽根から渡る渡し場

団子屋
道路の北側に今井家（屋号「稲荷屋」）が
あり団子屋を営む。現在道路の南側に移転。



１８中の島の渡し（越巻～中の島）

⇨ 1

写真の中洲は昔からあった
対岸地域を中の島と呼んでいた

６．越谷市内の草創期の小学校

菅波昌夫

（１）越谷市内における小学校の前身としての寺子屋

江戸中期以降から明治５年８月の学制の施行まで、市内においては庶民の教育機関として、寺子屋（てらこや）教育があった。一般農民も、商品流通の農村への浸透による影響で、読書・ソロバンを必要としたので、幕府や領主の支持が無いにもかかわらず、自然発生的に数多くの寺子屋が設けられ、普及していった。市内の寺子屋については、寺院に建立されている筆子中（ふでこちゅう）の記念碑や墓碑（墓塔）などによって、ある程度知ることができる。

例えば、次のとおりである。

・増林村では、梅光院の嘉永２年（１８４９）の墓碑

・大吉村では、徳蔵寺の明治２年（１８６９）の筆子中の墓碑

・瓦曽根村では、照蓮院の明治元年（１８６８）の墓碑

右記のように、僧侶による寺子屋師匠も多く、他には村吏、医師も確認され、越ケ谷町の岩松元旦、蒲生村の中尾良智、瓦曽根村の伊藤大庵などがあげられるが、次に述べる明治５年の学制の施行と共に、全般的に廃止され、国民教育に切り替えられていったのである。

（２）学制の頒布（発布）

明治５年（１８７２）８月に、明治政府の太政官（国政を総括する最高機関）により、「学事奨励に関するお触」が出された。『学制の頒布』である。今までのような支配者だけの学問だけではなく、人民自身の学問が必要であると説く。そして「これからは、一般の人民（華士族、農工商、婦女子）は、必ず村には不学の家が無く、家には不学の人が無いように」と述べている。

そして、全国を八大学区（北海道、東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方、中国地方、四国地方、九州地方）に分け、各大学区に大学校１校、中学校３２校、各中学区に小学校２１０校を設ける規定であったから、全国の小学校は５３、７６０校となり、当時の人口で約６００人に１小学校の割合であった。しかしこれはあまりにも拙速主義のため計画通りにはならなかった。

（３）越谷市内の小学校の誕生

最初は、寺院の堂舎などが利用され、小学校（下等小学校）は４年制であった。この頃は、家庭の都合で、働いて家計を支えること、農業に励むことが大切で、学校は役に立たないし、時間の無駄だと思われていた。そのために、学校に入る児童は少なかった。

学校に入ったとしても４年の卒業まで残る生徒はさらに少なかった。越谷地域では、東京などへ子守に出されたり、家の手伝いをさせられたりしたという。

当時の村の人口については、この冊子の「越谷地域の町村の変遷」の中の「戸口の推移」の明治９年の資料をご覧願いたい。

次に越谷市内において当時の各町村に設置された小学校をわかっている範囲内で一覧表にして紹介する。

村名	開校日	設置場所	学校名	児童数（男・女）
東方村	明治６年１月１５日	観音寺内	培根学校	１０５（　７６・２９）
越巻村	明治６年２月１日	満蔵院内	越巻学校	２６（　１６・１０）
大竹村	明治６年４月１０日	東養寺内	大竹学校	９２（　８４・　８）
袋山村	明治６年４月１７日	持福寺内	袋山学校	４７（　３５・１２）
荻島村	明治６年５月１日	玉泉院内	荻島学校	７８（　６８・１０）
増林村	明治６年５月１日	林泉寺内	増林学校	１１１（　７１・４０）
越ケ谷町	明治６年	越ケ谷宿	越ケ谷学校	１６６（１０８・５８）
大沢町	明治６年	照光院内	啓明学校	９０（　５７・３３）
四丁野村	明治６年５月３日	迎摂院内	四丁野学校	１８８（１５０・３８）
増森村	明治６年５月２４四日	真正寺内	増森学校	８０（　７０・１０）
七左衛門村	明治６年６月１６日	真福寺内	育幼学校	７３（　５５・１８）
西方村	明治６年６月１９日	安養院内	進文学校	５５（　３８・１７）
蒲生村	明治６年６月２０日	浦蔵院内	蒲生学校	７５（　５９・１６）
平方村	明治６年７月１日	林西寺内	平方学校	５０（　４１・　９）
小林村	明治６年１２月１３日	東福寺内	小林学校	４４（　３３・１１）
船渡村	明治７年４月７日	竜正寺内	船渡学校	５２（　５１・　１）
千疋村	明治７年	東養寺内	東養学校	１８（　１５・　３）

（４）その後の小学校の変遷

その後の小学校の制度はおおよそ次のように変遷する。

明治１４年　　初等科、中等科の各３年、高等科２年

明治１９年　　尋常小学校４年、高等小学校４年

明治４０年　　尋常小学校６年、高等小学校２年

昭和１６年　　国民学校初等科６年

昭和２２年　　小学校６年

そして、今日に至るのである。

※主な参考文献　「越谷市史」「越谷ふるさと散歩」「武蔵国郡村誌」

7．花田のスナッカラ地蔵

秦野秀明

近在近郷では、「花田のお地蔵様」として親しまれてきた。地元では、スナッカラ（砂河原）と呼ばれた古川（かつての元荒川）の河川敷に見られた耕地のそばにあったため、「スナッカラの地蔵」と呼ばれた。「スナッカラ」がなまってスマッカラと呼ぶ人もいたのかもしれないが、「スナッカラ」が正しい。一方、新方川（せんげん堀）対岸の増林の人々は、「見晴らし地蔵」とも呼んでいた。それは、この「花田の地蔵」が他所よりも最も高い所に立って目立っていて、周囲を見晴らしているように思えたからである。

花田の地蔵は、現在、花田４－２０－１３の佐藤家の南側路傍にあるが、花田の区画整理事業が行われる以前は、古川の自然堤防上の古川に沿った野道にあった。

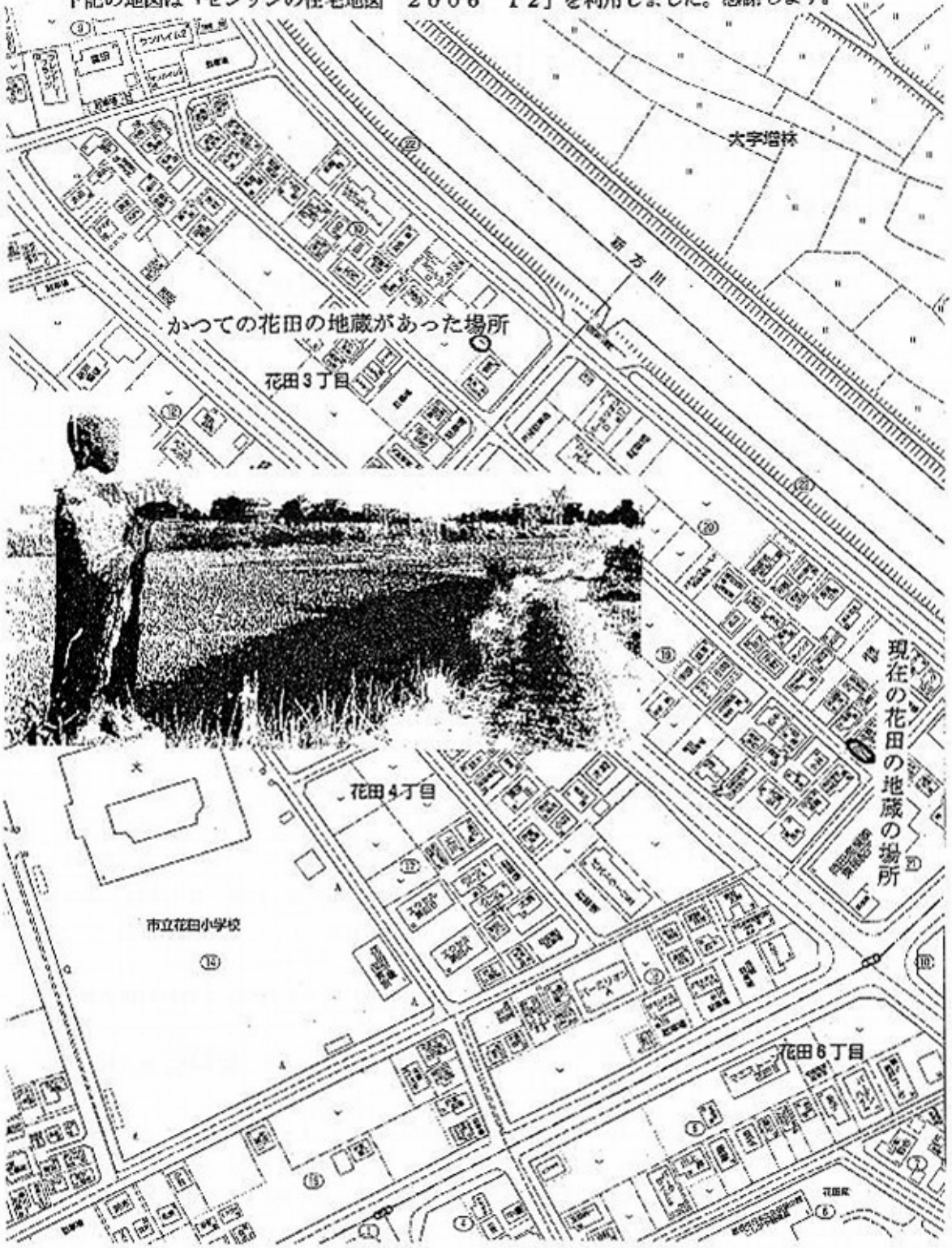
花田の地蔵には、昔、元荒川が花田を囲むように迂回して流れていたころ(古川の流路筋をさす)の言い伝えが残っている。増林１－１１の小島初治（はつはる）氏によると、次のとおりである。

地蔵の石仏を乗せた大型の船が、佐原から海を出て、江戸湾から元荒川を上ってここまで来て、地蔵を上流の秩父の札所に送り届けるため、元荒川の澪（みお、ここでは、川の中で深い所という意味で、遊水池のようであったという、現在の鷹匠橋南東、花田第一樋門の西側あたりにあった）で、川の水が増えるのを待っていた。増水すると、一気に上流へと川を上ろうとしたが、強風にあおられて船が乗り上げてしまう。そこで、この地蔵はここにとどまりたいのであろうと思い、見晴らしのよいこの場所に奉納したのである。

区画整理前の「花田の地蔵」とその他の石仏

現在地に移転後の「花田の地蔵」とその他の石仏

下記の地図は「ゼンリンの住宅地図　２００６　１２」を利用しました。感謝します。



上記の写真説明

野道に沿って見られる花田の地蔵の後ろ側は、急激な崖になっている。崖下の河川敷は、地元で「スナッカラ」と呼ばれた耕地である。河川敷の奥には、新方川（せんげん堀）が向かって左から右に流れている。

８．越谷市民がほこれる『中島の鷺山』

山本泰秀

増林地区の中島地域には、春から夏にかけて鷺の集団が東南アジア方面から大群で飛来して、繁殖行動と子育ての為に住み着く場所がある。中川と新方川の合流地点の新方川の中島側河川敷である。この合流地点には、越谷市中島と吉川市に架かる中川水管橋（庄和浄水場水管橋）があり、そのすぐ下流である。

鷺が飛来するこの地域は、現在は国有地となり、河川保全区域となっていて、竹・桜・リンゴ・イチョウ・胡桃（くるみ）・梅・栗・椋（むく）・シュロ、その他多数の雑木が生い茂り、今でも木々がそのまま現存して自然がよく残っている。

中川は、新方川との合流地点から上流の古利根川の合流地点までは大正十二年に開削され、別名「新川」とも呼ばれている。新方川は、中川との合流地点の手前の河道はかつての古利根川が曲流してきた旧河道である。

小鷺、中鷺、中大鷺、あま鷺、ごい鷺などの大群が、春の彼岸の頃になると、南から飛来し、群棲する。竹やぶの竹の枝に、樹枝や樹皮で直径３５センチメートル位の粗雑な巣を作る。そこへ青色の卵を４個程産卵する。鶏の卵と同じ位の大きさである。５月から８月にかけての育雛期には、約３倍程の数に増える。そして、秋の彼岸の頃になると、次第に飛び去っていく。中鷺、あま鷺は、夏鳥なので、台湾、フィリピン、マレーなどの南方へ飛んで行き、冬を越すのである。一方、小鷺は、古利根川、元荒川沿いで、一年中、内地にとどまっている。

鷺が多くいたとしても、繁殖行動の見られない地域は「鷺山」とは言わないが、ここは繁殖行為を伴っているので、「鷺山」と言えるのである。

旧浦和市の「野田の鷺山」は、享保年間（１７１６～１７３５）の頃から住み着き、かつては２５０年の歴史を誇っていて有名であった。民有地の宅地内の杉，ケヤキ、樫などの雑木林や竹林に巣を作っていた。昭和４７年頃に鷺はこの地を捨てた。竹の枯死や水田の埋め立てで餌が少なくなったりして、都市化の影響で安住の地ではなくなったのである。

野田の隣地の三室地区には、１・２年間、若干の鷺が住み着いていた場所があるが、今では全くいなくなった。

現在では、久喜市本町にある臨済宗甘棠院の境内裏山に、２００から３００羽程の鷺が巣を作り、「鷺山」を形成しているという。

中島の鷺も、地元住民の話では、１５年程前から数羽が住み始め、最盛期には２００から３００羽程に膨れあがったという。

一般には、鷺山近隣の住民にとっては、鷺山は迷惑なことであり、鷺の一日中の鳴き声、鷺の糞の臭いやほこりなどに耐え難くなり、追い飛ばしてしまうそうである。

しかし、中島の鷺山は、環境的には最適と思われ、広めな国有地であり、中川に隣接し、民間住宅からはかなり離れている。それ故にここでは周辺の住民も鳥の公害に悩まされることはないのである。

ちなみに中島の鷺山は、中島から眺めるよりは、対岸の吉川市川野、川富地区からの眺めが良いことを一言申し添えておく。

平成１９年１１月　記す

越谷市郷土研究会に入ってみませんか！

NPO法人・越谷市郷土研究会とは（平成２０年１１月現在）

◎史跡めぐりなどのイベントを毎月実施し、毎年、越谷市民まつり・越谷市民文化祭・こしがや文化芸術祭に展示部門で参加しております。

◎当会は、昭和４０年(1965)３月に発足し、平成１６年にＮＰＯ法人になりました。
現在は会員数が３００名を越える大所帯です。
ほぼ毎月行われる史跡めぐりは３８５回を数えるまでになりました。

◎当会の最近の主なイベントをあげますと次のとおりです。

平成１９年　７月２４日（火）川口・ＳＫＩＰシティ（アーカイブス）見学
平成１９年　７月26日～８月６日 越谷市立図書館「日本一の力持・三ノ宮卯之助」展
平成１９年　８月２５日（土）講演会「生誕二百年・三ノ宮卯之助」（越谷市教育委員会との共催）
平成１９年　９月２９日（土）ロマン漂う行田：足袋とくらしの博物館、忍城博物館
平成１９年１０月２４日（水）バス史跡巡り：妙義神社、碓氷峠と鉄道文化村
平成１９年１１月１４日（水）大間野の越谷市保存民家、旧中村家でのイベント
平成１９年１１月１８日（日）江戸東京たてもの園を見に行く
平成１９年１２月１５日（土）５０年前の越谷をさがし訪ねる
平成２０年　１月　３日（木）伊興七福神めぐり
平成２０年　２月２７日（水）六本木！みんなで歩けばこわくない？
平成２０年　３月２３日~２５日 姫路市の三ノ宮卯之助銅像と飛鳥、山之辺の道
平成２０年　４月　９日（水）宮内庁埼玉鴨場、越谷と鴨場
平成２０年　４月２２日（火）バス史跡巡り：県北！埼玉歴史のふるさと
　　鷲山古墳・金鑽神社・塙保己一生家・競進社模範蚕室・ミカ神社など
平成２０年　５月２４日（土）陽春の市内岩槻道と旧長島村
平成２０年　６月　４日（水）話題の地下神殿と初夏の江戸川堤散策
平成２０年　６月２２日（日）歴史講演会「旧・越ケ谷宿と街づくり」
平成２０年　７月２３日（水）小江戸「川越」の歴史を歩く
平成２０年　８月30日(土)歴史講演会・方言の世界～越谷吾山から方言学へ～ 教育委との共催
平成２０年　９月２７日（土）素敵旅！「織都」桐生
平成２０年１０月２２日（水）大宮の「鉄道博物館」と「県立歴史と民俗の博物館」
平成２０年１１月１４日（水）大間野の越谷市保存民家、旧中村家でのイベント
平成２０年１１月１８日（金）曹洞宗大本山総持寺の精進料理と横浜中華街

◎会報『古志賀谷』の隔年の発行（Ｂ５版、百十～百五十頁程度）及び無料配布（会員）
※なお、以上の他に、越谷市社会福祉協議会への寄付・文化財パトロールの活動なども行っております。また、学校や自治会、各団体などへの出前授業も承っております。

郷土研究会にお入りになるには

◎会費は、年間２千円（４月～翌年３月、会報・諸案内状・諸会議費等）です。
どなたでも気楽に入会できます。市外の方でも歓迎致します。

◎申し込みは、はがきに「平成何年度より入会」とお書きのうえ、住所・氏名・電話番号をご記入し、下記までお寄せ下さい。または当会の各種行事の際にお申し込み下さい。

〒343-0041　越谷市　千間台西　２－１７－１６　宮川 進 方
ＮＰＯ法人・越谷市郷土研究会
☎０４８－９７５－９１３９
事務所：旧日光街道沿いにある越谷産業会館の道路斜め反対側、
チャレンジショップ「夢空感（ゆめくうかん）」内にあります。

◎インターネットの「越谷市郷土研究会」には、越谷に関しての歴史の資料が満載されています。是非ご覧ください。